

広島市立大学塾
沖縄研修 報告会
「オキナワを歩きながら考えた ー過去・現在・未来ー」



* 以下は、2019年5月15日に行った学内報告会で使用したパワーポイントのスライド及び読み上げ原稿を整理したものです。

【担当:丸井】

(はじめ)

皆さま、この度はご多用の中お集まりいただきありがとうございます。今から「広島市立大学塾2期生沖縄研修報告会」を始めさせていただきます。

報告会を開始するにあたりまして、簡単に広島市立大学塾について紹介させていただきます。広島市立大学塾は、塾長の若林学長、副塾長の青木教授、塩田図書館長のもと、毎週水曜日16時30分から18時の90分間、情報科学部2年1名、国際学部2年6名の計7名で活動を行なっています。これまで様々なゲストをお迎えして、「リーダー像」について議論したり、沖縄研修にあたっての事前勉強を重ねてきました。

本日の報告会では、私たちが沖縄から学んだことを皆さんにも理解し、また感じ取っていただけるように精一杯発表させていただきますので、どうぞ最後までよろしくお願いたします。

それでは「オキナワを歩きながら考えた ー過去・現在・未来ー」について順次発表いたします。

【担当:長澤】

国際学部 2 年の長澤です。私からは本日の報告会の概要と沖縄戦について説明させていただきます。今回の研修で私たちは、過去に起きた沖縄戦から現在沖縄が抱えている基地問題まで、これまで知らなかった或いは知ろうとしなかった沖縄に関する問題について、数多く知ることができました。これからそれらを沖縄の「過去」、「現在」、「未来」の3つに分けてご報告します。

まずは今回の研修のスケジュールをご説明します。お手元の資料をご覧ください。資料 I は今回の研修の日程表となっております。研修は春休みの 2/27(水)~3/4(月)の 5 泊 6 日で実施しました。最初の 3 日間は広島経済大学主催の第 13 回「オキナワを歩く」というプログラムで、沖縄戦に纏わる慰霊碑を 3 日間、約 50 キロを徒歩で巡りました。3 日間の歩いた道のりは、お手元の資料 2 に青いマーカーで示されています。この間、食事は水、ポカリスエットとカロリーメイトだけです。徒歩は那覇空港を出発する時点から始まりました。車などは原則として使用できないため、宿泊施設からもこのようにまだ辺りの暗い早朝に出発

しました。これは壕に入る時の様子です。また、人目につかない場所にある慰霊碑も多く、このように草木が生い茂る道を通ったりもしました。



- 期間:2/27(水)~3/1(金)
- 沖縄戦の慰霊碑
- 約50kmを徒歩で巡る
- 期間中の食事は、
水
ポカリスエット
カロリーメイト
のみ





4日目は嘉手納基地を見に行ったり、沖縄国際大学のガイドサークル「スマイライフ」のガイドで激戦地の一つである嘉数高台を回りました。嘉数高台からは普天間基地も見ることができました。



嘉手納基地



5日目は広島市立大学塾独自のプログラムです。荒崎海岸や平和祈念公園などを訪れ、ロールプレイングやフィールドワークによる平和学習を行いました。



荒崎海岸



ひめゆり平和祈念資料館

沖縄戦の経緯

- 1945.4.1 米軍 沖縄本島中部西海岸に上陸
⇒飛行場2つを占領
- .5.11 米軍 首里総攻撃開始
⇒月末には完全に占領、日本軍は南部撤退を決定
- .6.23 牛島満中将 自決
⇒日本の組織的戦闘終了
- .8.15 日本 無条件降伏

次に沖縄戦の概要について説明します。1945年4月1日に、米軍が沖縄本島中部西海岸に上陸し、その日の内に2つの飛行場を占領します。日本軍は上陸地点での戦闘を避け、首里城の下に地下壕陣地構築し、これを防衛線と位置づけて持久作戦をとりました。米軍は上陸後約2週間で北部を制圧し、5月

には首里城地下の日本軍司令部の防衛線に迫ります。ここで、一進一退の沖縄戦で最も激しい戦闘が展開されますが、日本軍はしだいに制圧され、最終決戦を挑むか、南部に後退して持久戦を継続するか迫られます。軍の判断は後者で、5月下旬に日本軍は南部へ撤退を開始し、それから約1か月、6月23日、日本軍の最高司令官、牛島満中将が自決するまで組織的戦闘は継続し、南部に追い詰められた住民の死者も増加していきます。組織的な戦闘は終了し、8月15日を迎えても、ラジオも新聞もない状況では、兵士も住民もそれを知るすべはありませんでした。

日本軍と米軍の比較

日本軍		米軍
102,000	総兵力(人)	548,000
300~400	艦船(隻)	1,500
軍人:94,136 一般住民:94,000 計188,136	戦死者数(人)	12,520
竹槍 夜間の切込み 爆雷を担いでの体当たり	兵器・戦法	火炎放射器 ナバーム弾・黄燐弾 馬乗り攻撃

住民を巻き込んだ唯一の地上戦とされている沖縄戦ですが、実際は勝算があった訳ではなく、日本は本土決戦までの時間稼ぎにしたと言われています。

沖縄県平和祈念資料館が作成した資料をご覧ください。この表をご覧くださいと、兵力の差、艦船の差、装備の差が歴然としていることがわかります。この資料の解説ではその戦力に

は約10倍以上の差があったと指摘しています。

このような戦闘に住民は巻き込まれ、一般住民に94,000人以上、学徒隊などの沖縄関係の軍人・軍属を含めると12万人以上の犠牲者が出ています。この中には、投降を許さなかった集団死やスパイ視虐殺など、日本兵による住民犠牲者も含まれています。兵士よりも一般住民の犠牲者数をはるかに多かったことは沖縄戦の最大の特徴といえます。

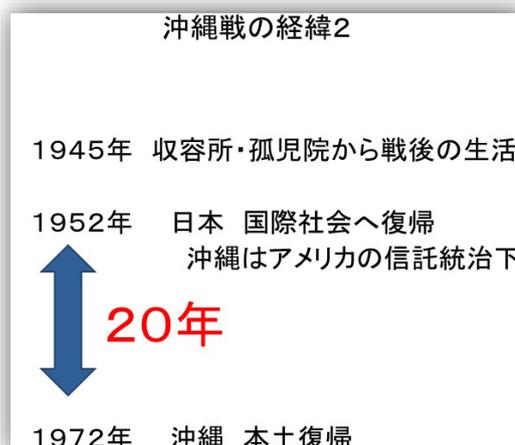
戦後、住民の生活は収容所(11 か所)から始まりました。一部の住民は数か月後、かつての居住地に帰ることが許されましたが、米軍基地として接収された地域の住民は集落ごと基地周辺に移転せざるを得ませんでした。

日本は1952年に独立し占領が終わりますが、この時沖縄は対象外でした。沖縄が日本に復帰するのはそれから20年を要しました。その間、沖縄の米軍基地はベトナム戦争などの拠点として機能するなど、アジアにおける米軍の主要な役割を果たす基地であり続けました。

これから過去、現在、未来の順で発表していきますが、各パートにはそれぞれ私たちが皆さんに伝えたい大事なキーワードがあります。

過去パートのキーワードは「想像」です。当たり前のことですが、私たちの世代は戦争を経験していませんし、戦争というのがどういうものなのかということを正確に語ることはできません。しかし、戦争の恐ろしさを未来に伝え、二度と同じ過ちを繰り返さないためには、当時起きたことをどこまで想像することができるかが重要になると思います。このパートでは、実際に沖縄戦を体験した方の証言・記録また私たち広島市立大学塾が独自で行ったプログラムを紹介します。ぜひ当時の状況を想像しながら聴いてください。

次に現在パートです。このパートでのキーワードは「責任」です。現在パートでは沖縄の基地問題について説明しますが、ここでいう責任とは沖縄県外に住む私たちが、日本の安全保障と引き換えに米軍基地建設・移設問題とそれに伴う諸問題を沖縄に押し付けてきたこと、そしてその実態をこれまで知らなかったこと、また知ろうとしなかったことに対する責任です。普天間基地の辺野古への移設問題は、最近ニュースや新聞などで話題にもなっているので良くご存じだと思いますが、基地の問題は沖縄だけの問題なのでしょうか？沖縄で感じた疑問、モヤモヤ感をぜひ皆さんと共有したいと思います。



過去

•記録・資料、証言から「想像」することの大切さ



現在



• 沖縄に押し付けてきたこと、それらを知らなかったことに対する「責任」

最後に未来パートです。キーワードは「伝える」です。幸運にも私たちは今回の研修で多くの戦争体験者の方から沖縄戦についての証言を聴くことができました。しかし、これからは、これらの方々の戦争体験を未来に伝えるのは私たちの役割です。そんな中で私たちは沖縄で戦争、そして平和について伝えようとしている同年代の学生に出会いました。それが「スマイライフ」です。未来パートでは彼らのように、過去の出来事を未来へ伝えようとしている人々にフォーカスします。

それでは、過去パートの池田さんにバトンタッチします。



【担当：池田】

国際学部2年の池田と申します。 よろしくお願ひします。

これから、私たちが沖縄で学んできた「過去」について、私と中島で報告させていただきます。私からは、聞いたこと・見たことを中心にお話ししたいと思います。ここでは、壕と証言に分けてお話しします。

今回の沖縄研修では、こちらの壕を見学することができました。沖縄本島の南部には、地質の関係で多くの自然洞窟があります。これらは、戦時中、住民の避難場所や仮の県庁、軍の司令部、病院として使われるなどの役割を果たしていました。これらは沖縄で「壕」や「ガマ」と呼ばれています。

- 県庁壕/シッポウジヌガマ
- 陸軍病院南風原壕
- 轟壕
- 糸洲の壕(ウッカーガマ)
- 糸洲第2外科壕
- 陸軍病院本部壕
- 伊原第一外科壕
- 第32軍最終司令部壕

この中で、今日は、陸軍病院南風原壕についてお話ししたいと思います。この壕は、沖縄戦当時、病院として使われていた壕で、ひめゆり学徒隊もここで傷病兵の治療に当たっていました。第二次世界大戦の戦争遺跡として初めて、文化財に指定された所でもあります。

2007年から一般公開もされ、私たちが中に入ることができました。中は暗くてじめじめして、高さもなく幅も狭い、非常に劣悪な環境でした。ここが病院に使われていたとは、到底考えられないような場所でした。当時は、細長い通路の片側にずらっと木製の二段ベッド

陸軍病院南風原(はえばる)壕



- 病院として使われていた壕
- ひめゆり学徒隊もここに動員
- 第二次世界大戦の戦争遺跡として初めて文化財に指定



<https://4travel.jp/domestic/area/okinawa/okinawa-hontonanbu/tamagusuku/park/11342335-tips/>
<http://rekiokiaki.blog.fc2.com/blog-entry-37.html>

を並べ、患者はそこに寝かされていたそうです。怪我をして運ばれてきた患者には、麻酔がない状態での手術・手足切断が行われました。米軍が迫ってきて退却するときには、歩けない患者を青酸カリで処分したそうです。

実際に壕に入って感じたのは、今は何もない場所にある、人間の確かな存在感でした。壕の中には、患者が岩に残した名前や、当時の医療器具が展示されていました。壕の中に残されたそんな小さな痕跡が、ここに本当に人間がいたことを、私たちに実感させました。私たちがいる壕でたくさんの人が死に、苦しんだ。この通路で忙しく働いた。看護師を呼ぶ声。うめき声。五感で想像した凄惨さは、言葉にするのが難しいのですが、胸をえぐられるような、息がしにくいような思いがしました。

次に、証言について、お話しします。

今回の「沖縄を歩く」では、4人の沖縄戦体験者の方にお話しを伺うことができました。二泊三日の工程で4人もの方のお話しを伺えたことは、とても貴重で、今後ないことだと思います。また、体調不良でお話を伺うことが叶わない方もいらっしゃり、このような機会が無くなってしまうことも近いのだと実感しました。

今回お話ししていただけたのは、こちらの方々です。元 県立第一高女 永岡隊 看護要員 翁長安子さん、当時15歳。元 県立第二高女 白梅学徒隊 中山きくさん、当時16歳。元 沖縄師範学校 鉄血勤皇隊 古堅実吉さん、当時15歳。そして、宮平盛彦さんです。今日は、この宮平盛彦さんのお話を、紹介したいと思います。

• 元男子学徒隊・通信隊 動員

• 終戦後、約2か月間、
終戦を知らずに壕に潜伏

• 沖縄戦によって、家族を全員亡くす
想像できるその場の状況

そこには確かに人間がいた

元 県立第一高女 永岡隊看護要員

翁長安子さん

(おなが やすこ)

当時15歳



元 県立第二高女 白梅学徒隊

中山きくさん

当時16歳



元 沖縄師範学校 鉄血勤皇隊

古堅実吉さん

(ふるげん さねよし)

当時15歳



宮平盛彦さんは、沖縄戦当時県立第一中学校の3年生でした。沖縄戦が始まる直前の3月学校からの呼び出しを受けて、男子学徒隊・通信隊に動員され、伝令や食料運び、水汲みなどの仕事をしました。宮平さんは、8月15日の終戦の後の、8月から11月の約2ヶ月の間、終戦を知らずに壕に隠れていたそうです。そして、沖縄戦によって、家族を全員亡くさ

れています。

もう少し詳しく、エピソードをお話します。

宮平さんが動員される時、宮平さんのお母さんは「あんたみたいな小さい子が行っても何もできないんじゃないか。そんな危険なところに行ったら危ないから。心配だから」と随分引き留めました。しかし、14歳の宮平さんは、「日本が負けるわけないから、すぐに帰ってこられる」と思って、お母さんを振り切って動員に向かいます。

動員された後、宮平さんが通信隊として文書を配っているときに、首里の近くの壕でお母さんとお姉さんに偶然会います。宮平さんの家は首里から5キロほど離れた所なのですが、お母さんとお姉さんは宮平さんが心配で追いかけてきたそうです。宮平さんはその後も軍の仕事をつづけました。戦いがひどくなって米軍が進行してくると、軍と住民は南部に逃げるのですが、宮平さんはその道中にお姉さんに再会します。そこで、両親と妹さんが亡くなったことを聞かされます。家族を失って一人になったお姉さんは、宮平さんに連れて行ってほしいと懇願しますが、軍務中の宮平さんは、それを断るしかなかったそうです。お姉さんはその後、機銃掃射によって亡くなりました。宮平さんの家族が最初に入っていた家の近所の壕では、ほとんどの人が助かったそうです。

●家族.....

必死に止めた母を振り切って動員された。心配になった母と姉は宮平さんを追って、危険な首里へ。お姉さんの懇願を断って軍務に。

家の近所の壕はほとんどの人が助かっていた.....

沖縄の組織的な戦闘は6月23日に終わり、8月15日には終戦を迎えますが、宮平さんは、沖縄戦の終了も終戦も知らずに11月まで壕に隠れていました。そのあいだ、終戦を知らせるために、現地の人や日本兵が壕に来て呼びかけていました。壕の中には、宮平さんの他に、一緒に行動していた日本兵や、他の日本兵のグループもいました。スパイだと疑って誰も終戦を信じなかったそうです。宮平さん自身もスパイかもしれないと思ったそうです。ある時、中に入ってきて呼びかける二人の日本兵がいました。壕の中にいた他の日本兵が、その人たちをスパイだと疑って射殺してしまいます。

11月ごろ、日本人が壕の入り口に置いて行った新聞を見て、宮平さんたちはやはり戦争は終わったのだと思うようになり、壕を出て収容所に入ります。そのあと宮平さんは家に帰ることができますが、先ほどのお話ししたように、家族は全員亡くなっていました。宮平さんは独りぼっちになってしまいました。

●壕に潜伏していたとき.....

日本人が、「戦争は終わった」「もう出てきても大丈夫」と訪れるようになった。壕の中に入ってきて教えてくれた人を、別の日本兵がスパイと疑って射殺した。

助けようとしていたのに.....。

お母さんの反対を押し切って動員に行かなければ、家族が追いかけてきて死ぬこともなかったんじゃないか……。あの時お姉さんが助けを求めたことを断らなければ……。助けようとしてくれた人を射殺してしまった……。その現場に自分はいた……。そんな体験に、宮平さんは今も苦しめられています。人前で話す依頼があると、眠れなくなり、最近は話すことがどんどん辛くなってきて

お母さんの反対を振り切らなければ・・・お姉さんの懇願を断ってしまった・・・助けようとした人を射殺した現場に・・・

今も苦しめられ、眠れない日もある。体験談を語ることがどんどん辛くなっている。

いるそうです。

実は今回、宮平さんが体調不良のため、本人からのお話は叶いませんでした。代わりにお話ししてくださったのは、こちらの大田光さんです。大田さんは、学生の頃から宮平さんと交流を続けている方です。大田さんは、「戦争体験者にとってこういう苦しみが終わることはないと思う」とお話しされました。自分を責める意識が消えない人。整理がつかずに話ができない人。そんな方の多い中で、運よく話を聞くことができた人たちには、話を聞いてその後、どうすればいいかを考えてほしい、と話してくれました。



「戦争体験者にとって、こういう悲しみが終わることはない」

「自分を責める意識が消えない」

「そんななか話を聞くことができた私たちはどうすればいいか」

実際にお話を伺ったり、いくつもの体験談に触れて気づいたのは、当時そこにいたのは、「ひめゆり学徒隊」や「通信隊」である前に、一人一人の人間だったということです。そして私たちにとっては74年も前の過去の出来事かもしれませんが、その人たちは今でも沖縄戦が終わっていない。戦争に今でも苦しめられていると知りました。

壕に入って想像したこと、証言を聞いて想像したこと、私の心に強く残っているのは、そんな「想像したこと」でした。人間は、人の痛みを想像することで、自分も痛むことができます。その痛みを感じることで、戦争の悲惨さについて考えるということ、牽いては平和を考えることなのではないかと感じました。

【担当:中島】

国際学部2年の中島です。よろしくお祈いします。

私は、沖縄研修5日目の3月3日、広島市立大学塾で平和祈念公園、荒崎海岸を訪れ、自ら体験し、想像したことを中心にお話しします。

まず私たちはこの沖縄平和祈念公園を訪れ、平和、戦争について考えました。

沖縄平和祈念公園は本島南部の「沖縄戦終焉の地」である糸満市摩文仁にあります。

公園内には、沖縄戦の写真や遺品などを展示した平和祈念資料館、沖縄戦で亡くなられたすべての人々の氏名を刻んだ「平和の礎」などがあり、沖縄戦でなくなった人々の冥福を祈っています。

沖縄平和祈念公園

沖縄県糸満市摩文仁

平和祈念資料館



平和の礎



沖縄戦で亡くなった方々を国籍、性別、年齢、関係なく慰霊している

また、毎年6月23日の「沖縄慰霊の日」にはこの場所で「沖縄全戦没者追悼式」が行われ、戦没者の御霊（みたま）を慰めるとともに世界の恒久平和を願う沖縄県民の思いを世界に発信しています。

8月6日が私たち広島県民にとって特別な日であるように、6月23日は沖縄県民にとって忘れることのできない特別な1日なのです。

この場所で私たちは沖縄戦で亡くなった方1人1人に人生があるということをより深く感じるために、個人に注目し、その方について調べ、実際にガイドするというを行いました。沖縄戦で亡くなったある人を1人選び、その方についての情報を平和祈念資料館から探し、どのようにガイドをするか自分なりにまとめます。

そして、平和記念資料館内にある戦没者氏名検索機で、平和の礎の何処へ刻銘されているか探し、その後実際にその方の名前の前まで行き、ガイドをしました。

資料館見学の際、沖縄戦のあまりの悲惨さ、むごさにガイドのための資料探しという目的を忘れるほど引き込まれました。資料を見ているとき、私の時間だけ止まっているようでした。

実際にガイドをしてみて私が非常に感じたことは”当然のことながら、1人1人にかけてえのない人生があったのだ”ということです。

沖縄研修の事前学習で平和の礎を調べたときはなくなった多くの方の名前が刻まれている大きなお墓のようなものという漠然としたイメージしか持てませんでした。しかし、実際に平和の礎をこの目で見て、ガイドをして、言葉では言い表せない、迫力とも切なさとも違う気持ちになりました。また、平和祈念資料館で見た地獄のような戦場の写真、当時の人々の生活を見た後に平和の礎を見ると20万人1人1人にそれぞれの人生があって、生活があって、家族があって、という風に名前裏にある1人1人の人生を想像できましたし、命の重さをひしひしと感じました。

また私たちはその日、沖縄県の最南端に位置するひめゆり学徒隊終焉の地である荒崎海岸を訪れました。

ひめゆり学徒隊とは、沖縄県で日本軍が中心となって行った看護訓練によって作られた女子学徒隊のうち、沖縄県第一高等女学校の教師、生徒と沖縄師範学校女子部で構成された

6月23日 沖縄慰霊の日

・沖縄戦の戦没者の霊を慰めて平和を祈る日

沖縄平和祈念公園にて「**沖縄全戦没者追悼式**」

・戦没者の御霊を慰める
・沖縄県民の思いを世界に発信

自らガイドしてみるフィールドワーク

・・・個人に注目

- ・「沖縄戦で亡くなったある人」に注目
- ・資料館でできるだけ多くの情報を集める
- ・どのようにガイドするかまとめる



名前裏にある1人1人の人生



ものです。スポーツや勉強にも一生懸命で、教師などを目指し学んでいた15歳から19歳の女学生たち、私たちと何も変わらない夢や希望にあふれた子たちが、「お国のため、天皇のため」と教育され、戦場へ動員されました。当時の学級広報誌が「乙姫」と「白百合」であったことからひめゆりと呼ばれるそうです。

まず、ひめゆり学徒隊の生徒らが荒崎海岸に追いつめられるまでを少し説明します。1945年6月18日、敗色濃厚となったころ、南風原の陸軍病院から南部へ撤退し、現在の「姫ゆりの塔」がある伊原周辺の壕で従事していた学徒隊に「あとは各個の判断において行動すべし」と軍から無情な「解散命令」が言い渡されます。米軍が目前に迫り、砲弾の嵐が吹きすさぶ中で彼女たちは病院壕を出て、裸同然の状態で作戦場に投げ出されました。

死の恐怖におののきながら壕を出ざるを得なかったひめゆり学徒隊は小さなグループに分かれ戦場をさまよいました。荒崎海岸の岩穴に追いつめられたグループは6月21日、米兵の銃撃の乱射を受ける中、第一高女の教師1人と生徒7人、その他2人が手りゅう弾で自ら命を絶ったといひます。

ここで「ひめゆり学徒隊」に所属し、その現場にいて生き残った宮城喜久子さんのお話を紹介します。宮城さんは当時沖縄第一高女4年、16歳でした。6月18日解散命令が出た後身を隠す壕もなく、学友たちとともに荒崎海岸まで追い詰められました。宮城さんのグループのうちの3名は途中で亡くなり、残った12名がここまで逃げてきたそうです。するとその時、日本兵が残っていると判断した米兵がこのあたり一帯を自動小銃で乱射し、先生はみんなのいる岩穴に飛び込み、宮城さんともう一人の生徒はすぐそばのくぼみに逃げました。先生はその岩穴で手りゅう弾を爆発させ、一瞬のうちに10名の命が失われました。宮城さんは気を失い、意識を取り戻したときにはすでに米兵に取り囲まれていたそうです。そうして宮城さんは命をつなぎ、この証言を残しました。荒崎海岸へ逃げる中で、『「おかあさんに会いたい」と泣きながら語った亡き友の最後の言葉は今も心の中にあり悲しみとともに消えることがない』と戦後45年の手記で宮城さんは書かれています。

そんな出来事が起きた荒崎海岸を私たちは訪れました。海岸はごつごつしていて靴を履いていても足裏が痛く、歩くのが大変で何度も転びそうになりました。

海岸の端にこの海岸に追いつめられて自決した「ひめゆり学徒隊」生徒たちと先生の慰霊碑があります。

この慰霊碑には「岩陰に一筋の黒髪 乙女らの自決の地なり 波もとどろに」という碑文



1945年6月18日 解散命令
「あとは各個の判断で行動すべし」

ひめゆり学徒隊戦死数 194人名
そのうち128名は解散命令後の死者

小さなグループに別れ、逃げるが荒崎海岸に追いつめられる

第一高女の教師1人・生徒7人・他2人 **集団自決**



荒崎海岸

・ひめゆり学徒隊終焉の地
「逃げ場を失った生徒たちが自決した場所」

が刻まれています。これは学徒隊の引率教師であった中曽根政善さんによる歌です。

私たちはこの海岸で、当時、実際に学徒たちが隠れた岩穴に入ってロールプレイングを行いました。先ほどお話をした手りゅう弾で自決をした10名はこの場所で亡くなったといわれています。岩穴は暗くて狭くて入っているだけでも何とも言えない息苦しさ、不安感、重圧感がありました。海はアメリカ軍の艦船に埋め尽くされ、海岸には死体がゴロゴロと転がっている状況の中で、米軍の投降勧告のマイク音声が響いたとき、もし自分が当時の日本兵だったら、教師だったら、学徒だったら、子供を連れた母親だったらなど1人1人役割を決め、自分だったらどうしていただろうかということを想像してみました。

私は、自分が学徒のひとりだったらと想像しました。米軍に投降勧告の命令をだされたとき私は投降せずに自決をするだろうと想像しました。友人や家族が次々と死んでいっている中、自分だけ生き残るなんて申し訳ないと思ったからです。また、当時の「お国のため、天皇のため、決して米軍の捕虜になってはいけない」という間違った教育に私もとりつかれていただろうと考えました。

私たちよりも小さな子たちが生死の狭間で恐怖におびえながらこのような極限の選択を迫られていたこと、「名誉の戦死をしろ」という国からの命令に対して、自分の身を挺して生徒を守ろうとする教師、母親がわが子を思う気持ち、想像するとどれも心が痛くて涙が出ました。それはおそらくこの場所で岩陰に隠れたからこそ深く想像ができたのだと思います。その場に身を置き体験、想像することの重要性をこの場所で体験しました。岩に触れた時の感触、風や匂い、暗さ、狭さ、暑さ、当時の人々の気持ち、あの場所で想像したこと、体感したことは今も体に、心に焼き付いています。戦争体験者、またそれを語る方が減ってきている今、“想像すること”は“は私たちが過去を学ぶ重要な方法の1つだ”と思います。どれだけたくさんの戦争体験を聞いてもどれだけ多くの戦争跡地を巡ってもその

慰霊塔 ひめゆり学徒隊散華の跡



当時の人々が実際に隠れた岩穴で



体験、想像することの重要性

岩に触れた時の感触
風や匂い
暗さ、狭さ、暑さ
当時の人々の気持ち



現在を生きる私たち

戦争体験者が減ってきている今・・・
同じ過ちを繰り返さないためには過去を学び、伝える必要がある

どれだけたくさんの戦争体験を聞いても
どれだけ多くの戦争跡地を巡っても
そのすべてを理解することはできないけれど
私たちは想像によって過去を学ぶことができる

すべてを理解することはできないけれど私たちは想像することによって過去を学ぶことができると思いました。過去を想像することの重要性、心で感じることの大切さをこの研修で私たちは学びました。

【担当:齊藤】

国際学部 2 年の齊藤秀太です。僕は現在という観点から沖縄について話します。私たちは沖縄研修で嘉手納基地と普天間基地の二つの基地を見ました。

沖縄に基地ができた背景

まず、沖縄に基地ができた背景を説明します。1945年4月、米軍は沖縄に上陸すると同時に、「銃剣とブルドーザー」で住民を追い出し、家を押しのけ、田畑を潰して土地を確保し、基地を建設し始めました。戦後も米軍は、東アジアにおいて重要な軍事拠点として、沖縄における基地を拡充してきました。そこに作られた基地は、朝鮮戦争やベトナム戦争の拠点となりました。また、日本も安全保障と引き換えに沖縄の基地を容認してきました。そういう意味で、日本本土の人たちは、沖縄の人に対して、見て見ぬ振りをし続けたと言えるのかもしれませんが。また、琉球が日本に併合された時から見て見ぬ振りを始め、戦争中はもちろん、戦後も続けていたという見方もできるかもしれません。

沖縄に基地ができた背景

- ・1945年4月、沖縄に米軍上陸→基地建設
- ・戦後基地拡大
- 「銃剣とブルドーザー」で住民を追い出し、家を壊し、田畑を潰して、基地建設

日本本土の人たちは、琉球併合の時から沖縄に対して見て見ぬふりをしてきたかも？
→朝鮮戦争やベトナム戦争の拠点に

嘉手納基地

では、その基地の一つである嘉手納基地について説明します。運用部隊はアメリカ空軍ですが、海軍、陸軍、海兵隊も使用する、極東最大の基地の一つとされています。飛行機が多く常駐していましたが、訪れた当日は土曜日ということもあり、あまり飛行機は飛んでいませんでした。嘉手納基地は国際情勢と密接に関わっているのも特徴で、現在、嘉手納基地から飛び立つ飛行機には、アメリカの飛行機の他に、北朝鮮の「瀬取り」を監視に向かうフランス、ニュージーランド、オーストラリア、カナダの飛行機もあります。



- ・広さは羽田空港の約1.3倍
- ・極東最大の米軍基地
- 北朝鮮の「瀬取り」監視
アメリカ・フランス・カナダ・
ニュージーランド・オーストラリアの飛行機が離着陸

普天間基地

次に普天間基地についてです。普天間基地については移設問題のニュースでよく耳にするとお思います。まず注目してもらいたいのが、写真です。奥に滑走路が写っていますが、手前には住宅地が密集しています。この一帯はクリアゾーンという、事故が起こりやすい危険なエリアです。それゆえに普天間基地は「世界一危険な基地」と言われており、辺野古基地移設問題が浮上しています。実際に肉眼で見ると危険さがマジマジと伝わってきました。感覚的にこのままでは危ないと思いました。



基地から派生する問題

続いて、基地から派生する問題を話します。まずは環境問題です。写真をご覧ください。これは汚染が確認された場所です。数字が赤くなっているのは現在も米軍施設として使われていることを示しています。基地周辺ではダイオキシンや発がん性が指摘されるフッ素化合物などが検出されています。さらに、基地内を調査する権限が日本にはありません。それゆえに、米軍施設が明け渡されてから、環境汚染が明らかになるという現実があります。次に騒音問題。米軍基地周辺ではジェット機等による騒音がとても問題になっています。嘉手納飛行場や普天間飛行場の周りでも環境基準を超える騒音が確認されています。騒音が受忍限度を超えるという判決が出ても、賠償金は出るが飛行機は止めることはできない現実もあります。



日米地位協定と米軍基地

また、大きく関わるのが、日米地位協定です。「日米安全保障条約」という安全保障の大きな枠組みの細かいこと、具体的なことについて触れているのが、「日米地位協定」です。日米地位協定 17 条に注目して読みあげますと、「公務外の事件・事故の場合、裁判権は日本側にあるが、被疑者がアメリカ側に拘束された場合は、日本側が起訴するまで、引き続きその身側をアメリカ側が拘束する」と書いてあります。

つまり、事件が起きても、「被疑者の身柄はアメリカが確保します」ということです。この日米地位協定により、起訴に至らなければ、米兵の事件への関与が明らかでも身柄を拘束できなかつたり、日本側が起訴前に身柄引き

日米地位協定17条
公務外の事件・事故の場合、裁判権は日本側にあるが、被疑者がアメリカ側に拘束された場合は、日本側が起訴するまで、引き続きその身柄をアメリカ側が拘束する

- ・起訴に至らなければ、米兵の事件への関与が明らかでも身柄を拘束できない
- ・日本側が起訴前に身柄引き渡しを要請
- アメリカ側は明確な理由を示さないまま拒否

実例：1995年9月4日 沖縄米兵少女暴行事件
2002年11月2日 婦女暴行未遂事件

渡しをアメリカ側に要請しても、アメリカ側は明確な理由を示さないまま拒否されたりすることがありました。実例としては、1995年9月4日の「沖縄米兵少女暴行事件」や2002年11月2日の「婦女暴行未遂事件」などがあります。

嘉手納弾薬庫

さらに基地に関連することとして弾薬庫を取り上げます。嘉手納基地の隣には、ジャングルのような山があり、その山の中に嘉手納弾薬庫があります。その広大な敷地で、弾薬の貯蔵と整備が行われています。しかし、外から見ただけでは、そこが弾薬庫とは誰も気づきません。弾薬の量や弾薬庫の詳しい内容はアメリカ軍の機密で軍関係者でもトップの人でないと知らないと言われていました。それだけ大きな機密情報であり、米軍は何をどのくらい弾薬庫に持ち込んでいるのか日本は知る由もないそうです。沖縄の住民は米軍が何をしているかもわからないまま、受け入れざるを得ない状況であるということを現場で知って、あらためて、日本は自国の安全保障と引き換えに大きな負担を「沖縄に背負わせている」と感じました。



- 弾薬の貯蔵
- 詳しい内容はアメリカ軍の機密
- ⇒アメリカが中に何をもち込んでいるかわからない

沖縄に背負わせている！！

広島に極東最大級の弾薬庫！！

では一転して、沖縄から広島に目を向けてみます。すると、実は沖縄に似ているところが広島にもあります。なんと、広島には江田島市に秋月弾薬庫、呉市に広弾薬庫、東広島市に川上弾薬庫と3つの弾薬庫があります。この弾薬庫はとても大きく、全国の米軍基地に弾薬を供給しています。現在も使用されているのですが、ベトナム戦争時や湾岸戦争時にも使用されました。ただ、テロ対策防止というアメリカ側の言い分で、現在地方自治体に弾薬輸送に関して知らされるのは日時のみで、広島にある弾薬庫から何を、どのくらい、どこに運ばれているかはわかっていません。

あまり知られていないけど...



- 秋月弾薬庫(江田島市)
- 広弾薬庫(呉市)
- 川上弾薬庫(東広島市)

*** 全国の米軍基地に弾薬を供給**
ベトナム戦争時や湾岸戦争時にも使用された
現在地方自治体に弾薬輸送について知らされるのは日時のみ

広島のお隣 岩国基地

さらに広島の際には岩国基地があり、現在拡大されています。弾薬庫が近いことや朝鮮半島に近いことなど様々な理由で、重要な拠点らしく、空母艦載機やステルス戦闘機などが近年配備されています。広島・岩国も沖縄のように、さらに大きく、重要な軍事拠点になるかもしれ

海兵隊使用(普天間基地と同じ)

<p>地理的条件</p> <ul style="list-style-type: none"> • 呉海上自衛隊と連携取りやすい • 朝鮮半島に空中給油なしで空爆可能 • 弾薬庫に近い • 中国に対する圧力 	<p>岩国基地拡大中</p> <ul style="list-style-type: none"> • 空母艦載機やステルス戦闘機配備 • 滑走路拡張 • 米軍住宅地整備
---	--

広島・岩国も沖縄のように、さらに大きく重要な軍事拠点に？！

ないと伺える動きが見えます。広島にとって、沖縄のことが決して他人事ではありません。

まとめ

僕たちは沖縄に行くことで、現在の沖縄の問題をより深く学びました。そして、米軍基地・環境汚染・騒音・裁くことのできない犯罪など、様々な部分で、戦前、戦中、戦後と本土に住む日本人たちが見て見ぬ振りをし続け、沖縄に多くのことを背負わせていることを知りました。

知らなかった責任（まとめの続き）

現在という観点で沖縄を見たときに大きく基地問題があります。ただ、この基地問題は複雑であり、研修を通して「こうあるべき」とは言えませんでした。けれども、沖縄の歴史や、基地があることにより、米軍関係者により犯罪の存在や騒音、環境汚染の問題が生まれていることを、遠いよその出来事と考えるのではなく、安全保障という国全体の問題として自分にも関わることだという意識を持たなければ、基地問題を議論することはできません。だから、若い世代は特に、自分にも関わりのあることとして「まず知ること」が大前提だと感じました。

基地問題について
研修を通して「こうあるべき」とは言えなかった

けれども...
議論をする上で
“安全保障は自分に関わることだという意識を持つこと”
その上で、基地・騒音・環境汚染など
“知っておくことが大前提”
若い世代は

「まず知ること」

【担当：丸】

過去、現在の沖縄をみてきて、みなさんは何を感じたでしょうか。

沖縄戦や基地問題と聞いて何を思い浮かべるかは人それぞれだと思います。自分自身は「ひめゆり」だったり、明石家さんまさん主演の「さとうきび畑の唄」や辺野古移設問題というワードが頭に浮かびました。

ではなぜ、広島に住んでいる私が、沖縄や沖縄に対する責任について学び、想像し、考えることができたのか、と言うことを考えたときに、何かしらの形で「沖縄戦」や基地問題について伝えていこう、記憶と記録を残していこうとしている人たちがいるのだということに気が付きました。今回の沖縄を歩くでもたくさんの「伝えよう」、「残していこう」としている人たちに出会いました。

まず、いのうえちずさん。広島の実出身の方です。2009年から「沖縄を歩く」のコーディネーター的な役割で特に団体に所属するという形ではなく、フリーランスで個



2009年から「沖縄を歩く」のコーディネーター的な役割で個人的にお手伝い。

日程調整や、証言場所の選定、送り迎えなどをやられている。

人的にお手伝いをされています。沖縄戦の証言者さんたちの日程調整や、証言場所の選定、送り迎えなどをやられています。

大田光さん。宮平盛彦さんのお話をしてくださいました。戦争経験のある方から聞き取りを行い、自分の口からその聞き取ったことを話して、伝えています。広島という伝承者的な立ち位置の方です。



そのほかにも、4日目にガイドをしてくださった伊佐さんや、ピースボランティアなどで活動されている方もいらっしゃいます。

その中でも、3日間ともに沖縄を歩いた、沖縄国際大学の「スマイライフ」というサークルに感銘を受けました。

スマイライフとは「smile」と「life」を掛け合わせた造語で、笑顔で生きられることが平和なのではという意味が込められています。沖縄国際大学総合文化学部社会文化学科の学生のみで構成されたサークルです。

学科で学んだことについてガイドを通して社会還元するというモットーで活動しているそうです。その主な活動内容は、沖縄へ来る修学旅行生への戦跡や沖縄の歴史について説明、ガイドを行っています。では、彼らはどういう思いで活動しているのでしょうか。

スマイライフ代表の座間味かなよさんにお話を伺いました。「修学旅行の一部の少ない時間で、中高生からしたら、何で沖縄にまで来て平和学習をしないとイケないのと思っている子がほとんどだと思う。さらに2~3時間のガイドを1回聞いただけで全ての知識を身につけることは難しいと思う。だけど、わざわざ沖縄に、実際に地上戦が行われた地に来たからには、自分たちのガイドはもちろん、遺跡だったり、へりの騒音だったり、そういうのを目で見て、耳で聞いて五感で感じてもらいたい。そして、すべてのガイドを通して、最終的に一人ひとりが自分にとっての平和って何だろうと思ってもらいたい、考えてもらいたい」と話されていました。

スマイライフのみんなと話していると、沖縄戦や基地問題について、一人ひとりそれぞれの考えや思いを持っていました。スマイライフに所属する大学生が沖縄戦や基地問題、沖



縄の歴史について学んでいるのは、自分たちがヒロシマについて学ぶのと同じです。しかし、スマイライフのみんなは、話を聞くだけでなく発信しようとする行動し、伝えようと努力しています。今までの自分たちは「学ぶ」、「知る」ということだけだったと思います。戦争経験者の高齢化が進む中で、スマイライフのように発信し、大学生も含めて、もっと伝えていくような行動をしていくべきなのではと考えました。

戦争のことを語る人がいなくなり、記録がなくなってしまうたら、戦争の記憶が薄れ、当時の状況を想像することも、なぜ日本に米軍の施設があるのかもわからなくなってしまう可能性があります。今まで沖縄が背負ってきた、基地という名のとても重いものを、無責任に押し付けたままにもなってしまいます。

そうならないためにも、これから先の時代へ戦争の記憶と記録を伝えていくべきなのではないでしょうか。今の私たちのような若い世代がカギとなっています。当時を想像することの重要性、沖縄について知らなかった責任、過去を伝えるという三つのことについて考えていきたいと思えます。「過ち」を繰り返さないためにも。

ご清聴ありがとうございました。

過去・・・沖縄の歴史を振り返って、
当時を**想像**する

現在・・・沖縄の現状を知り、私たちの
沖縄に対する**責任**を知る

未来・・・過去、現在の沖縄を未来へ
伝える

【担当:西岡】

(質疑応答)

質疑応答に移ります。ご質問、ご意見、ご感想などをいただければと思います。挙手をお願いいたします。

(最後)

以上をもちまして、「広島市立大学塾 2 期生沖縄研修報告会」を終わります。ありがとうございました。



荒崎海岸 「ひめゆり学徒隊 散華の跡」